

18世紀末の雲南省普洱府漫撒における会館建立と茶園開発

——石屏漢人移民の活動を中心として——

西 川 和 孝

Guild Hall Construction and the Development of Tea Gardens at Mansa,
Pu'er Prefecture, Yunnan Province in the late 18th Century:

the activities of Han Chinese migrants from Shiping County

NISHIKAWA Kazutaka

メコン川東岸に位置する普洱茶の産地、雲南省西双版纳傣族自治州勐臘県易武郷及び漫臘郷一帯では、18世紀末以降漢人移民の経済活動が活発化するに伴い、周辺地域への茶園の拡大が起こった。

このきっかけとなったのが、清朝政府が雍正年間に行なった直轄地化である。これ以降、石屏漢人の入植が進んだ。そして、その一方で、茶山管理の責任を負わされた倚邦土把総曹氏と易武土把総伍氏は貢茶献納の負担に苦しみ、当地で茶園を営む石屏漢人移民の協力を必要とするようになったのである。そこで、両土司が出資する形で漫撒に石屏会館が建設され、「漫撒新建石屏会館記」が立てられた。寄付者として両者の名を刻んだ同碑文は、この地を訪れる石屏漢人に彼らの入植の正当性を示し、この地域への移住を促し、茶園開発を後押しする要因の一つとなった。

キーワード：普洱茶、漢人移民、会館、石屏県、茶園

はじめに

本論文では、メコン川東岸に位置する普洱茶の産地、雲南省西双版纳傣族自治州勐臘県易武郷及び漫臘郷一帯を対象として、18世紀末に当地に建設された会館を通して、漢人移民の入植と茶園の開発を明らかにすることを目指す。

雲南省では、14世紀末に明王朝の版図に組み入れられたことを契機として、漢人が居住するようになった。当初、彼らは駐留軍への食糧供給を目的としており、その居住地域は平野部に限られていた¹⁾。し

1) これら雲南に設置された軍屯の数や位置については、方国瑜「明代在雲南の軍屯制度與漢族移民」（趙虎編 2003『方

かし、18世紀になると、清朝政府により鉱山開発が積極的に進められ、漢人の鉱山労働者が山間部にも進出していくようになった²⁾。さらに中国大陸では新大陸からトウモロコシやジャガイモなどの作物がもたらされたことで、人口爆発が起き、18世紀末頃から大量の漢人移民が新たな生活の場を求めて流入してきた³⁾。また、これら外からの漢人移民の流入と並行して、雲南省内からも漢人移民を輩出する地域が出現する⁴⁾。そして、こうした断続的な漢人の増加に伴い、省内における彼らの経済活動も活発化していくのである。

漢人は故郷を離れ外地で経済活動に従事する際、しばしば現地で地縁を中心とした互助会を組織し、その活動拠点として会館を建設した。こうした会館については、北京の会館を中心にその中国国内の分布を明らかにした何炳棣氏の先駆的研究がある⁵⁾。また、地方の会館に関しては藍勇氏が、四川、貴州、雲南などの中国西南地域の会館を取り上げ、漢人移民との関係性の中でその存在を位置づける試みを行っている⁶⁾。

清朝期には雲南南部に位置する普洱の茶山地域においても、漢人が茶栽培や交易に従事していたことが知られる。クリスチャン・ダニエルス氏の研究によれば、18世紀初頭には漢人が茶山に入り込み、地元の少数民族が栽培した茶を収集し、それを売買することで利益を得ていたことが確認されている⁷⁾。また、武内房司氏は、18世紀末には漢人が実際に土地を購入して茶園経営を行なうようになっていたことを明らかにした⁸⁾。しかし、これら論考では茶に関わる漢人移民の活動を明らかにしているものの、その一方で活動拠点となった会館については一切触れられていない。会館の設置は、編纂史料では不足がちである漢人移民の経済活動の規模を知る一つのバロメーターともなる。そこで、筆者は2010年に現地で入手した碑文史料（資料）「漫撒新建石屏会館記」を通して、少数民族地区である茶山において会館がどのようにして建設され、如何なる役割を果たしたかを明らかにする。そして、こうした会館設置が更なる漢人移民の流入に繋がったことにも言及したい。

本論に入る前に漫撒に進出し、「漫撒新建石屏会館記」を立てた石屏漢人について若干の説明を加えておく。石屏県は、雲南省紅河哈尼族彝族自治州に属し、現在の雲南省の省都昆明より南へ約250キロ下った地点に位置する。県内のほとんどは山地で占められており、わずかに存在する盆地周辺部の開発には

国瑜全集』第三輯、雲南教育出版社) pp.145-332に詳しい。

2) 楊煜達 2004「清代中期（公元 1726-1855）滇東北的銅業開發與環境變遷」『中国史研究』03期、pp.157-174。

3) 李中正 1984「明清時期中国西南的經濟發展和人口增長」『清史論叢』第5輯、pp.50-102。

曹樹基 2001『中国人口史』第5巻、清時期、復旦大学出版社、pp.214-243。

4) 野本敬・西川和孝 2008「漢族移民の活動と生態環境の改変——雲南から東南アジアへ——」『論集モンsoonアジアの生態史——地域と地球をつなぐ——第2巻 地域の生態史』pp.15-34。

5) 何炳棣 1966『中国会館史論』台湾学生書局。

6) 藍勇 1996「清代西南移民会館名実與職能研究」『中国史研究』第四期、総七二期、pp.16-26。

7) クリスチャン・ダニエルス 2004「雍正七年清朝によるシブソンパンナー王国の直轄地化について——タイ系民族王国を揺るがす山地民に関する一考察——」『東洋史研究』六二（四）pp.94~128。

8) 武内房司 2010「一九世紀前半、雲南南部地域における漢族移住の展開と山地民社会の変容」（塚田誠之編『中国国境地域の移動と交流——近現代中国の南と北——』有志舎、pp.117-143）。

限界があったため、古くから外へ発展を求める傾向があり、周辺地域へ多くの移民を輩出してきた⁹⁾。

第一節 「漫撒新建石屏会館記」について

メコン川東岸地域は古くから普洱茶の産地として知られていた。この地域はもともと12の盆地（ムン）を基盤としたタイ系土司のシブソンパンナー王国に属していた。シブソンパンナー王国は、国王（ツァオファー）をリーダーとしてそれぞれのムンを管轄する首長（ツァオムン）が従属する形で成り立っており、清朝政府はシブソンパンナー国王（ツァオファー）に車里宣慰司使の称号を与えることで慰撫を図っていた。また、王国の経済基盤は、平野部で水田耕作を営むタイ系民族によって支えられていたが、山地で焼畑耕作を中心に生活をする山地民によって生み出される山貨も重要な収入源であった。その中でも普洱茶は主要な山貨の一つであり、現在のプーラン族やハニ族にあたる山地民がその栽培を担っていたのである。

しかし、普洱茶が生み出す利益を目的として漢人が茶山に入り込むようになると、両者の間で摩擦が生じ始めた。そして、雍正5年（1727）メコン川東岸の莽芝茶山で、地元山地民が高利貸しで暴利をむさぼる漢人に対して不満を爆発させたことをきっかけとして、大規模な反乱が起こったのである。結果的に、この事件は、雍正7年（1729）の雲貴総督鄂爾泰による直轄地化の実施に繋がった。加えて、鄂爾泰は、反乱の原因となった漢人の茶山への直接的な買い付けを禁止し、清朝の官吏に売買の管理を委ねる総茶店制度を設けた。しかし、この制度も時間が経過するにつれて形骸化し、漢人が茶山地域に入り込み、実際に土地を購入して茶園経営に携わるようになり、ついには18世紀末シブソンパンナー国王（ツァオファー）が茶山の経済的価値を鑑み、漢人移住を正式に許可する方向へと向かうのである¹⁰⁾。漫撒に会館が建設されたのは、正にこうした転換期に当たる。

ここで扱う「漫撒新建石屏会館記」は、現在、西双版纳傣族自治州勐臘県易武郷にある中国普洱茶古六大茶山茶文化博物館に展示されている。当博物館は2006年10月30日に開館し、普洱茶に関する石碑や道具、契約文書などを所蔵している。当博物館を管理している文物管理所職員の刀易学氏（29歳）の話によると、ここは、元石屏会館の敷地内であり、石屏会館の正殿を博物館にしたといい、易武の石屏会館そのものは乾隆50年（1785）に設置されたとする。現在この場所はすでに小学校となっており、博物館は運動場の端に位置している。

また、石碑が立っていたとされる漫撒は、後述するように博物館のある易武郷から離れた場所に位置しており、博物館内に所蔵されている12点の碑文や篆額などの文物を含め、刀氏の前任者が漫撒に出向

9) 野本敬・西川和孝前掲「漢族移民の活動と生態環境の改変——雲南から東南アジアへ——」『論集モンsoonアジアの生態史——地域と地球をつなぐ——第2巻 地域の生態史』pp.15-34。

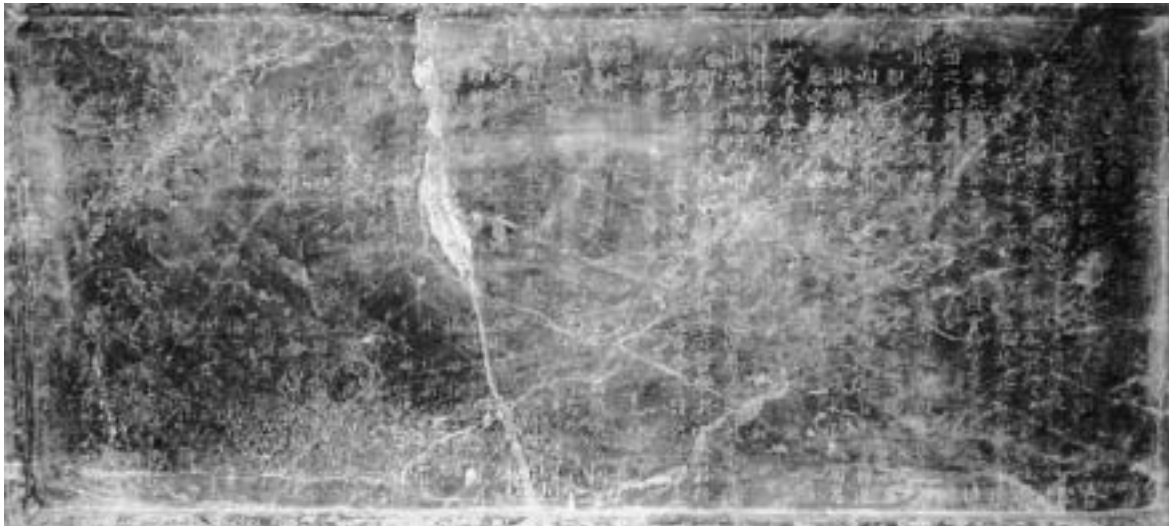
西川和孝 2011「明清時期雲南省石屏盆地における漢人移民の耕地開発——官による水利事業と科挙合格者の増加を中心として——」『国立歴史民俗博物館研究報告』162集、pp.67-97。

10) これら一連の歴史的流れについてはクリスチャン・ダニエルス前掲「雍正七年清朝によるシブソンパンナー王国の直轄地化について——タイ系民族王国を揺るがす山地民に関する一考察——」及び武内房司前掲「一九世紀前半、雲南南部地域における漢族移住の展開と山地民社会の変容」を参照。

き収集してきたものであるという。

筆者は、2009年8月21日と2010年3月26日の2回に渡り、当博物館を訪問し、写真と実物を照らし合わせながら、釈文を作成した。本来であれば、拓本を採り、そこから文字に起こすべきであるが、碑文が博物館内に設置されているということから状況が許されなかった。石碑は写真①に見えるように長方形の形を成しており、文字は楷書で書かれ、縦25字、横40行である。文字数に関しては、摩滅が激しい箇所があり、確定するには至らなかった。

ちなみに「漫撒新建石屏会館記」の録文については、高発倡著『古六大茶山史考』にすでに集録済みであるが、横組簡体字である上に、今回の釈文作成作業を通して、複数の間違いが見受けられた¹¹⁾。ただし、本碑文自体が一部激しく損傷を受けており、筆者自身も録文を作成する際に非常な困難を要したこともあり、本試釈に多数の誤りが含まれていることは免れえず、専門家のご指正をまって将来の補訂を期す次第である。



写真① 「漫撒新建石屏会館記」の碑面。

「漫撒新建石屏会館記」録文及び試訳

以下の録文を作成するに際し、原文の繁体字や異体字などは可能な限り常用漢字に直した。1～42は、碑文の行を示し、空白部分は空格を表す。碑文が摩滅している箇所に関して、判読不明或いは判読が曖昧な字は□で、文字自体の存在を確認出来ない場合は…でそれぞれ表す。また、23行目には印鑑が刻されているが、判読が困難なため㊟と記す。

〔録文〕

- 1 漫撒新建石屏会館記
- 2 今福実而既広矣。

11) 高発倡 2009 『古六大茶山史考』雲南美術出版社、pp.330-331。

3 聖天□□□所及東斬西被□□□□荒陬僻壤，人迹罕
 4 □□□，而園遷有無化居者，□□肩相摩，轂相擊，趾相
 5 錯也。吾滇僻處天末，屏其疆郡也。茶山又其遠鄙也。漫
 6 撒又茶山之小者也。然屏人之往來於茲者，如履坦途，
 7 無疵癘之憂，無蟲恙之患。虛往實歸，實繁有徒。此豈惟
 8 聖治之德威，所既疑其中亦有
 9 神助焉。然而遠別鄉井，出入於蠻煙瘴雨之鄉，而棲息無定，
 10 即次未安，非所以敦鄉誼慰旅人也。歲丁未，屏人相聚
 11 而言曰，吾屏中大□，園都省会遠，而普洱皆有會館，漫
 12 撒雖陋，豈可無之。爰各捐金若干，建立大殿、陪殿、廂房、
 13 廳堂，巍然可觀。中供
 14神武大帝像，左為
 15 財神殿，右為
 16 山神土地祠，而井、竈、什物陸續置備，俾屏人之往來者得
 17 所憩息，而歲時伏臘祈禱酬願者亦得歇於斯、飲於斯，
 18 無異在乾山，異水間也。□既訖，走書告余，請記其事。余
 19 維揚
 20 聖治之威，妥
 21神靈之祐，敦鄉誼而安旅人，一舉而衆善備焉。所樂為記之。
 22 至捐金之數列名於左，使後之人得以考焉。
 23 楊進士出身蒙化序教授加一級郡人盧錚謹記。①②
 24
 25 世襲管理茶山一帶地方部序曹捐銀伍□兩。
 26 世襲管理易武一帶地方部序伍捐銀陸□兩。
 27 思茅趙純普捐銀陸□。 楊 昭捐園…。
 28 □□□捐□□兩。 牛 岐捐園…。
 29 丁聚陽捐銀拾貳兩。 李春明捐…。
 30 新興聶 慥奉燈壺對作銀貳兩。許田囡捐園…。
 31 □ 瑁園銀伍兩。 王 盛園…。
 32 李 浩捐銀肆兩。 遊耀龍園…。
 33 徐元鼎捐銀伍兩。 吳 翺園…。
 34 余迎恩捐銀伍兩。 黃阿貴捐銀…。
 35 居翰堂捐銀貳兩。 楊 文捐銀□□。
 36 李 囡捐銀貳兩。 許木匠捐銀伍錢。
 37 劉可法捐銀貳兩。 郭 秀捐銀參錢。
 38 劉德榮捐銀園兩。 黃著板捐銀貳兩。

39 曾必泰捐銀貳両。 張汝渚捐□□□。

40 何炳極捐銀貳圓。 □……………。

41 丁定桎捐銀伍兩。

42大清乾隆五十四年季秋月既望衆姓薰沐敬勒。

〔訳文〕

漫撒新建石屏会館記

今、広く幸福に満ち足りつつある。

…………東方から西方に伝わる…………荒れ果てた片田舎の僻地であり、人はほとんどおらず…貨物を運搬し、交易をする者が、お互いに肩をすれ違い、車輪をぶつけ、足を交合わせる。我が滇地方は僻地にあり、石屏はここに属している。茶山もそうした遠方の辺土であり、漫撒もまたその内の小さな茶山の一つである。しかし、この地を訪れる石屏人は、まるで平坦な道を歩くかの如く、怪我や疫病を恐れることも、虫や病気に煩わされることも無く、虚しくやって来ては満ち足りて去る。こうした人々が非常に多い。これは天子の徳によるものだけでなく、神の佑助もあるのではないかと考えている。しかしながら、石屏人は遠く故郷を離れ、毒気を含む雨や霏にまみれた土地を行き来しており、彼らは居住するところが定まらなければ、休むこともなく、故郷のよしみを結び、旅人を慰める場所もない。

丁未の年（乾隆52年〔1787〕）に石屏人が集まって言うことには、我が石屏は…………、普洱には至る所会館があり、たとえ漫撒が辺鄙といえども、どうして会館がなくてよいであろうか。そこで、皆が少しずつお金を出し合い、正殿、陪殿（正殿の左右に位置する建物）、廂房（中庭を挟み、正殿の左右に位置する建物）、庁堂を建立した。この聳え立つ様子は一見の価値がある。正殿の中心には神武大帝像を供奉、左側は財神殿、右側は山神土地祠とした。また井戸、かまど、日常品を次々に揃え、往来する石屏人に休息を与え、毎年伏臘の時期、つまり、夏の三伏と旧暦の十二月に祈祷、布施、祈願をする者にも休憩や飲み物を提供した。これは、乾燥した山の中でおいしい水に出会うようなものである。

落成すると、会館を建てた人々が私に書面で告げ、この事を記すようにとお願いした。思うに、天子の政治の威を示し、神霊の御加護を頼み、故郷のよしみを結び、旅人を慰めるため、この度の建設でこれらの目的を見事に果たすつもりである。そして、この喜びを記す次第である。

寄付については名前を左記に羅列し、後世の人々に思い巡らさせる。

進士出身の蒙化庁教授加一級普洱府人である楊盧錚が謹んで記す。

世襲管理茶山一帯地方部庁曹は銀五□両を寄付する。

世襲管理易武一帯地方部庁伍は銀六□両を寄付する。

思茅の趙純普は銀六□を寄付する。楊昭は銀…を寄付する。

……両を寄付する。牛岐は銀…を寄付する。

丁聚陽は十二両を寄付する。李春明は…を寄付する。

新興の聶慥は灯を納める。一対で銀二両。許田文が銀…を寄付する。

□瑁は銀五両を寄付する。王盛は…を寄付する。

李浩は銀四両を寄付する。遊耀龍は…を寄付する。
徐元鼎は銀五両を寄付する。呉聯英は…を寄付する。
余迎恩は銀五両を寄付する。黄阿貴は銀…を寄付する。
居翰堂は銀二両を寄付する。楊文は銀□□を寄付する。
李沢は銀二両を寄付する。大工の許は銀五錢を寄付する。
劉可法は銀二両を寄付する。郭秀は銀三錢を寄付する。
劉徳栄は銀二両を寄付する。黄著板は銀二両を寄付する。
曾必泰は銀二両を寄付する。張汝渚は□□□を寄付する。
何炳極は銀二両を寄付する。□…
丁定桎は銀五両を寄付する。

大清乾隆54年（1789）9月16日、衆姓の薰沐が敬い刻む。

第二節 普洱府内における石屏漢人の移民活動

「漫撒新建石屏会館記」の内容は大きく分けて、①石屏漢人が漫撒に会館を建設するに至った経緯、②会館の構造や使用方法、③会館建設に際しての寄付者一覧の三部から構成されている。まず、本碑文から読み取れるのは、当時すでに多数の石屏出身の漢人が行商で漫撒を訪れており、会館建設の必要性に迫られていたことである。

前章で説明した如く、普洱には古くから茶交易から生み出される利益を求めて漢人が訪れていたが、大挙して押し寄せる契機となったのは雍正年間に鄂爾泰が実施した改土帰流と考えられる。咸豊元年序刊『普洱府志』巻9「風俗」は以下のように記す¹²⁾。

国初に改土帰流が行なわれ、臨元鎮から新嶧營の兵士がこの地に派遣され駐留し、さらに江西、貴州、湖南、湖北、四川、陝西各省の商人が住み着くようになった。そこで人口が稠密になり、田畑も次第に開かれ、家々では詩書を学ぶようになり、士は礼讓を尊び、日増しにその変化は高まっていた。

つまり、改土帰流以後、漢人流入が急速に進行した。特に茶山には多くの漢人が経済的利益を求めて入り込んだ。18世紀末頃の茶山の様子を記したと推測される『滇海虞衡志』「志草木第11」は、普洱茶を産する6ヶ所の茶山を挙げた上で、次のように紹介している¹³⁾

12) 咸豊元年序刊『普洱府志』巻之9、風俗。原文は以下の通り。「国初改土設流，由臨元分撥新嶧營官兵駐守，並江右、黔、楚、川、陝各省貿易客民家於斯焉。於是人煙稠密，田地漸開，戸習詩書，士敦礼讓，日蒸月化，駸駸乎。」

13) 檀萃（1724～1801）輯『滇海虞衡志』志草木第11、茶（『問影樓輿地叢書』）。原文は以下の通り。「出普洱所属六茶山，一曰攸樂，二曰革登，三曰倚邦，四曰莽枝，五曰蛮崙，六曰慢撒，周八百里，入山作茶者数十万人。茶客収買，運於各處，每盈路，可謂大錢糧矣。」

普洱所属の六茶山は、攸楽、革登、倚邦、莽枝、蛮崙、漫撒（漫撒）であり、その周囲は八百里に及ぶ。そして、山に入り茶を栽培する者は数十万人に上り、茶客が茶を買い上げ、あちこちで運んでいるため、道はいつも人で溢れており、大変な富というべきである。

また、普洱府の平野部に関しても咸豊元年序刊『普洱府志』巻9「風俗」に「平野部に住むものは、新平、嶧峨、石屏、江楚（長江流域）の出身者が多く、男女は皆官語を話す。」と記されており¹⁴⁾、漢人の入植は茶山に止まらなかったことがわかる。とりわけ、ここでは、改土帰流を契機として駐留した雲南省内の新平や嶧峨出身者の外に、漫撒に会館を建設した石屏漢人の名が挙げられていることが注目されよう。こうした普洱府における石屏漢人の活発な活動を裏付けるように、本碑文中にも「普洱には至る所会館があり、たとえ漫撒が辺鄙といえども、どうして会館がなくてよいであろうか。」という一文が見え、乾隆年間にはすでに同郷組織の活動拠点となる石屏会館が各地に存在したことがわかる。普洱府の石屏会館については、民国『石屏県志』巻6「風俗」に次のようにある¹⁵⁾。

石屏人は群居を好み、知識人は講習を重んじ、商人は会合を重視するため、遠くに出かける者は往往にして会館を建設する。規模は壮大で、京師にある雲南の別荘のようである。省城、思茅、蒙自、箇旧、元江、普洱、他郎、磨黒、雅口、茶山にそれぞれ会館がある。

表 1

	地名	時期	典拠
1	思茅		民国『石屏県志』巻6、風土。 『雲南省地誌（思茅県）』第3巻、p.29。
2	普洱	道光年間にはすでに存在した。	咸豊元年序刊『普洱府志』巻11、祠祀。 民国『石屏県志』巻6、風土。 『雲南省地誌（寧洱県）』第2巻、p.42。
3	他郎（墨江）	道光年間から民国期まで一貫して存在した。	道光『雲南通志』巻92、祠祀志。 光緒『雲南通志』巻92、祠祀志。 民国『石屏県志』巻6、風土。
4	磨黒		民国『石屏県志』巻6、風土。
5	雅口		民国『石屏県志』巻6、風土。
6	茶山	「漫撒新建石屏会館記」より、乾隆年間にはすでに複数存在した。また、未確認ではあるが、乾隆6年（1741）に石屏会館が漫磚茶山で建てられたとの記載がある。	民国『石屏県志』巻6、風土。1957年に六大茶山の調査を行なった蔣銓氏は、調査記録である「古“六大茶山”訪問記」の中で、漫磚茶山の関帝廟跡（元石屏会館）には碑文が残っており、その碑文によれば、石屏会館は乾隆6年（1741）春に建てられ、同40年（1775）に改修されたとあると記している。「古“六大茶山”訪問記」は、雲南省政協文史委員会編 2004『雲南文史集粹（五）』（雲南人民出版社、pp.228-239）に所収。
7	威遠	道光年間には既に存在した。	咸豊元年序刊『普洱府志』巻1、威遠庁城図。

14) 咸豊元年序刊『普洱府志』巻之9、風俗。原文は以下の通り。「平川居者多新平、嶧峨、石屏、江楚籍貫，男女皆官語。」

15) 民国『石屏県志』巻6、風俗。原文は以下の通り。「屏人喜群居，士重講習，商重類聚，出遠方者往往立会館，規模宏遠，如京師有彩雲別墅。省城、思茅、蒙自、箇旧、元江、普洱、他郎、磨黒、雅口、茶山各有会館。」

加えて、表1にあるように多くの地方志にもその存在が確認されることから、普洱府各地に石屏漢人が進出していたことは間違いないであろう。

以上より、会館建設が具体化した乾隆末期の段階で石屏漢人は、すでに普洱府に多数移り住み、各地に会館を設置し、地縁を紐帯とした広大なネットワークを張り巡らしていたと考えられる。

第三節 石屏会館建設の背景

このように18世紀末には石屏漢人は普洱府各地にネットワークを広げ、その最前線であった漫撒に会館建設を企図しつつあった。漫撒は、茶山として大きな利益を生み出す土地であり、石屏漢人にとっては重要な戦略拠点であった。また、漫撒の地元社会においても石屏漢人の存在価値は高まりつつあった。最近、武内房司氏の研究により、乾隆51年（1786）2月16日付けの文書で、清朝から易武一帯の茶山管理を任されている易武土把総伍氏が、漫撒で土地を買い茶園を営んでいる漢人に、山地民のみに課せられていた清朝宮廷用の貢茶献納を含む各種賦役を負うことを求めていたことが明らかにされている¹⁶⁾。このことを本碑文の内容と照らし合わせれば、これら漢人が石屏出身者を指し、石屏漢人が実際に茶栽培にも携わっていたのは間違いないであろう。また、こうした各種負担の義務を求める文書の発行は、逆に言えば、漢人移民が納税などの負担さえすれば、この土地に居住することを易武土把総伍氏自らが認めることを意味した。つまり、当時、石屏漢人はすでに漫撒にとって欠くことの出来ない存在となりつつあったといえよう。さらに乾隆54年（1789）12月24日付けでシブソンパンナー国王（ツァオファー）である車里宣慰司が、漢人が茶栽培を担う現状を鑑み、易武土把総伍氏の方針を追認する文書を出し、移住の容認が決定的となった¹⁷⁾。

漫撒の会館建設計画が具体化したのは、乾隆52年（1787）であり、完成は乾隆54年（1789）9月16日であった。これは、易武土把総伍氏とシブソンパンナー国王（ツァオファー）が相継いで移住を許可した時期と重なり、会館建設がこうした移民認可の動きと連動していたことを示唆している。これを裏付けるのが本碑文に付されている会館建設寄付者一覧表の冒頭に見える名前である。通常、こうした寄付者一覧表が作成される際、その名前の序列には、その人物の社会的地位や寄付金の多寡などが強く反映される。そして、ここでは「世襲管理茶山一帯地方部庁曹は銀五□両を寄付する。世襲管理易武一帯地方部庁伍は銀六□両を寄付する。」と普洱の茶山を管理する曹氏と伍氏の名が最初に記されている。雍正年間の改土帰流以降、清朝政府は、茶山の管理を地元の有力者に委ねる方針を採っていた¹⁸⁾。咸豊元年序

16) 武内房司 前掲「一九世紀前半、雲南南部における漢族移住の展開と山地民社会の変容」。武内氏は、《民族問題五種叢書》雲南省編輯委員会編『中国少数民族社会歴史調査資料叢刊 傣族社会歴史調査（西双版纳之三）』（雲南民族出版社、1983年、pp.76-77）に記載されている乾隆51年（1786）2月16日付けの文書「管理易武一帯地方錢糧茶務軍功司庁伍為給照以專責成事」及び乾隆54年（1789）12月24日付けの文書「車里軍民宣慰使司宣慰使刀為給照事」を引用し、この論文において全文記載した上で日本語訳を付している。

17) 註16を参照のこと。

18) 咸豊元年序刊『普洱府志』卷之19、芸文志、「籌酌普思元新善後事宜疏」。これは、当時の雲貴広西総督尹繼善が雍正年間の騒乱の後に記した善後策であり、茶山の管理について「倚邦の茶山一帯には窩泥の人々が住んでいる。見

刊『普洱府志』巻18「土司」では六大茶山の管理責任者について以下のように記述している¹⁹⁾。

倚邦土把総は普洱府の辺外に位置し、思茅庁東南境内にあり、府城から六站の距離であり、五つの茶山を管理する。攸楽茶山は普洱府の南方七〇五里にあり、そこには架布と嶧崆の両山がある。莽芝茶山は府の南方四八〇里に、革登茶山は府の南方四八五里に、蛮磚茶山は府の南方三百六十里に、倚邦茶山は府の南方三四〇里にそれぞれ位置する。毎年規定に基づき、貢茶を取り扱う。

と、まず倚邦土把総の名を挙げ、続いて易武土把総に言及している²⁰⁾。

易武土把総は普洱府の辺外に位置し、思茅庁東南境内にあり、府城から八站の距離である。府の南方一八五里にある漫撒茶山を管理し、倚邦に協力し貢茶を引き受ける。

つまり、倚邦土把総曹氏が、六大茶山の内、攸楽、莽芝、革登、蛮磚、倚邦の5カ所を、易武土把総伍氏は、磨者河東岸の漫撒茶山をそれぞれ管轄し、貢茶の任務を負っていたのである。そして、石屏会館の建設には、これら茶山の管理を担う倚邦土把総曹氏と易武土把総伍氏の全面的な協力があったのである。

こうした背景には、易武土把総伍氏と石屏漢人側のそれぞれを取り巻く事情があった。前述したように易武土把総伍氏は貢茶献納負担が重くのしかかっており、茶園経営を行なう漢人の協力が必要であった。また、石屏漢人側においても、碑文に「漫撒もまたその内の小さな茶山の一つである。」とあるように漫撒茶山は将来の発展が見込まれた。加えて、この乾隆末期は、雲南に大量の漢人移民が流入する時期と重なり、故郷の石屏でも急激な人口増加により、環境に大きな負荷がかかるなどの問題が生じ、新たな生活の場を求める社会的圧力が高まっていたと考えられる²¹⁾。そこで、両者の間で取引がなされ、漢

たところ、倚邦土弁の曹当齋は人柄も誠実で、軍に従い賊を討ち、勤勉なことでも有名であるので、命令を下して倚邦茶山を管轄させるべきである。(其茶山倚邦一帯均係窩泥。查有倚邦土弁曹当齋為人誠実、隨師剿賊、勤勞素著、応將倚邦茶山責令管轄。)」と記している。

19) 咸豊元年序刊『普洱府志』巻之18、土司。原文は以下の通りである。「倚邦土把総在普洱府辺外、係思茅庁東南境内、距城六站、管理各茶山、一攸楽茶山在府南七百零五里、内分架布、嶧崆両山、一莽芝茶山在府南四百八十里、一革登茶山在府南四百八十五里、一蛮磚茶山在府南三百六十里、一倚邦茶山在府南三百四十里。按毎年定例承辦貢茶。」

20) 咸豊元年序刊『普洱府志』巻之18、土司。原文は以下の通りである。「易武土把総在普洱府辺外、在思茅庁東南境内、距城八站、管理漫撒茶山、在府南一百八十五里、協同倚邦承辦貢茶。」

21) 18世紀末から19世紀初頭に初頭にかけて石屏には大量の漢人移民が流入し、環境に大きな負担を与えていた。これに関して、嘉慶4年(1799)に立てられた「秀山寺封山育林碑」には、「元来宝秀の盆地の周囲にある山々は、皆高く険しく、龍潭湧泉も無く、ただ山中から滲みだした水を引いて粮田を灌漑してきた。昔は木々が鬱蒼と茂り、山から水が滲み出し、その量も豊富で、稲作に適していた。今は山肌がむき出しになり、水量も少なく、稲作が困難になった。このような弊害は、方々で無知な連中が火を放って山林を焼き、次々と木の根を掘り起こして土地を耕したことに起因する。その結果として、山は崩れて水は枯れ、雨で大水が出ると、土砂が押し流されて田畑を埋めてしまうようになった。利益は少なく、損害は大きく、ここ数年来の被害は、特に甚大である。(原宝秀一壩、周囲皆崇山峻嶺、原無龍潭湧泉、只是山中浸水、引取灌漑粮田。在昔樹木深叢、山浸水大、栽挿甚易。今時光水小、苦

人側が貢茶や賦役などの様々な義務を負うことを条件に、易武土把総伍氏は漢人移民の入植を認める許可を出し、会館の建設に協力したというのがその実態であろう。さらに茶交易の利益を確保したいシブソンパンナー国王（ツァオファー）も易武土把総伍氏の提言を追認することとなった。こうした易武土把総伍氏の移住に対する「お墨付き」と会館建設などの全面的協力は、後にこの地域に大量の石屏漢人を呼び込むこととなった。

第四節 茶園開発における立碑の意義

漫撒では易武土把総伍氏の支持を受け、会館が設置されたが、碑文中にもあるように当時茶山としてはその規模は決して大きくはなかった。これは、史料上でも確認できる。例えば、第二章でも取り上げた18世紀末の茶山の様子を伝える『滇海虞衡志』には、六大茶山として攸楽、革登、倚邦、莽枝、蛮崙、漫撒と紹介されているが²²⁾、ここではこの順序からいけば、漫撒茶山はより遠方に位置し、茶山としての位置付けは決して高くなかったことが知られる。しかし、時間が下るにつれ、六大茶山に登場する茶山の名前にも変化が見られるようになる。咸豊元年序刊『普洱府志』巻8「物産」では以下のように述べる²³⁾。

茶は普洱府辺外の六大茶山に産する。……茶の味の優劣に従って分類すると、蛮磚が一番で、次が倚邦、その次が易武、さらにその次が莽芝である。…そして、漫撒、攸楽と続き、最後が平野部で産する茶であり、これは壩子茶と呼ばれる。これが六大茶山の産地である。

ここでは、味の優劣という限定付きではあるものの、それまで六大茶山に含まれていなかった易武の名が倚邦について挙げられている。さらに清朝末期になると、この傾向はより顕著となる。

19世紀、清朝は欧米各国との海外貿易が増加するにつれて、外国人を雇うことで海関（税関）の貿易量を正確に把握しようとする外国人税務司制度を導入した。そして、戦争の賠償金などの財政赤字で苦しむ清朝は、欧米列強の思惑も重なり、各地に海関を設置し、関税収入の確保を図ったのである。この一貫として思茅にも海関が設置され、関税が徴収されるようになった。この際に、海関に赴任した外国人は、税関の収入源となる現地の物産について詳細な報告書を記している。20世紀初頭の思茅の海関報告書には普洱の茶山に関する報告がなされており、そこには、著名な普洱茶の産地として、倚邦、易武、

於栽種。弊因各處無知之徒放火燒山林，連挖樹根，接種地，以致山崩水涸，及雨水發時，沙石冲滯田畝。所得者小，所失者大。數年來受害莫甚於此。」と漢人移民による森林の伐採などが詳細に描かれている。本碑文は、唐立編 2008『中国雲南少数民族生態関連碑文集』（総合地球環境学研究所研究プロジェクト4-2「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究」中国歴史班編、pp.90-93）所収。

22) 註13を参照のこと。

23) 咸豊元年序刊『普洱府志』巻之8、物産。原文は以下の通りである。「茶産普洱府辺外六大茶山。……茶味優劣別之，以山首數蛮磚，次倚邦，次易武，次莽芝。…次漫撒，次攸楽，最下則平川産者名壩子茶。此六大茶山之所産也。」

攸楽、漫撒、漫臘の名が見え²⁴⁾、磨者河を挟む東側に位置する易武、漫撒、漫臘において茶園が開発されつつあったことがわかる。

こうした当該地域の茶園の拡大には、石屏漢人が深く関係していた。民国年間の普思沿邊行政総局の責任者柯樹勛の娘婿であった李弘一氏は、『鎮越県新志稿』の中で以下のように記している²⁵⁾。

民国34年（1945）著者である李弘一が鎮越県を視学した際、人口総数を調査したところ、合計22128人であった……全県22128人の内、漢人が12パーセントを占め、その大部分が第一区易武郷鎮の茶生産地区に住み、茶葉の摘み取りや加工に従事し、その中でも石屏漢人出身者が最も多かった。

このように易武地域の漢人は石屏出身者で多数占められ、そのほとんどが茶業に従事していたのである。易武は、易武土把総伍氏の管理する区域内であり、乾隆年間末期に移民の正式許可が下りて以降、漫撒と同様、石屏漢人の入植が進んだ。道光18年（1838）に立てられた「易武茶案碑」には次のようにある²⁶⁾。

張応兆・呂文彩らの本籍はともに石屏州である。乾隆54年（1789）に先の宣慰使は呂文彩らの父や叔父を招いて茶園を拓かせ、招牌きよかしょうを与え易武の土弁に代わり貢茶を納めさせた。これが今も変わらず続いてきた。

ここでは、1789年にシブソンパンナー国王（ツァオファー）自ら石屏漢人の入植と茶園開発を奨励して以降、約半世紀に渡って石屏漢人が茶園の経営を行ってきた事実が確認できる。こうしたことから、18世紀末の漫撒における漢人入植の認可と石屏会館建設は、易武漫撒の茶園開発史を考える上で、大きな転換点となったことは明らかであり、その後の石屏出身者を中心とする漢人移民の増加と茶園の開発に繋がった。そして、漢人入植が進んで行く中で、石屏会館と、会館建設の寄付者として易武土把総伍氏の名が記された「漫撒新建石屏会館記」の存在は大きな意義を持つようになったと考えられる。

そもそも文章を石に刻み、碑文という形で残す行為は、決して気まぐれで行なわれたのではなく、そ

24) China Imperial Maritime Customs, *Decennial Reports 1902-1911*, vol.II, Szemao p.290. 内容は以下の通りである。

Tea, known under the name of Puerh (普洱) tea and famous for its good quality, is grown in the Chinese Shan States, in the hills south of the town of Kenghung, or Kiulungkiang (九龍江), as it is called by the Chinese. Other principal tea-growing centres are Ipang (倚邦), Iwu (易武), Yulo (攸楽), Mansa (漫撒), and Manla (漫臘) — places all situated in the Kenghung territory, to the east of the Mekong River.

25) 李弘一撰 1984『鎮越県新志稿』（台北、復仁書屋）第参編、経済志、第1章、人口篇、p.42。内容は次の通りである。「民国三十四年、著者視学鎮越時、調査所得之人口総数、共為二万二千一百二十八人……全県二万二千一百二十八人、漢人約佔百分之十二、大都聚居于第一区之各郷鎮産茶地区、従事採製茶葉。以石屏人為最多。其餘百分之八十八、皆為土著民族。」

26) 「易武茶案碑」は現在茶山博物館に保存されている。本碑文の全文及び詳細については、唐立編前掲『中国雲南少数民族生態関連碑文集』（pp.186-191）所収。引用箇所の内容は以下の通りである。「張応兆、呂文彩等均係隸籍石屏州。於乾隆五十四年前宣憲招到文彩等父叔先輩、栽培茶園、代易武賠納貢典、給有招牌、已今多年無異。」

の必要性から生じたものである。碑文の目的は、人の集まる所に立て、その内容を出来るだけ多くの人間に通知することであり、何度も目にすることで社会に浸透させていくことができる。また、碑文は、文書などの紙と異なり、時間の経過や風雨による劣化を防ぎ、時代を超えて利用できるという特徴を持ち、次世代に伝える媒体としては非常に有用であった²⁷⁾。当該碑文中にも「寄付については名前を左記に羅列し、後世の人々に思い巡らさせる。」と見え、碑文を作成した人物に後世の人々へのメッセージという意味合いが込められていたことは間違いないであろう。

こうした点から本碑文を分析すると、不特定多数の人間が見ることが出来た漫撒は碑文の立地として非常に適していた。後の《補説》でも説明するように、磨者河東岸の漫撒は、思茅から易武へと向かう茶交易の幹線道路上に位置しており、易武への玄関口の役目を果たしていたため、往来する人間はここを通過し、長期に渡り多数の人間の目に何度も触れることとなった。とりわけ、漫撒会館は、碑文中に「井戸、かまど、日常品を次々に揃え、往来する石屏人に休息を与え、毎年伏臘の時期、つまり、夏の三伏と旧暦の十二月に祈祷、布施、祈願をする者にも休憩や飲み物を提供した。」とあるように当地を訪れる石屏漢人のための休憩所としての機能を有し、石屏出身者は、会館内で一服しながら、この碑文を目にしたと推測される。

漫撒に石屏会館が建設されて以降、易武漫撒の茶山には多くの石屏漢人が入植したが、彼らが遠く故郷から易武土把総伍氏の管轄する磨者河東岸地域に足を踏み入れた際、石屏会館の建築物とその建設に手を貸した伍氏の名を刻んだ碑文を目にすることは、一種の安心感を与えるなど一定の心理的効果を及ぼし、この地に石屏漢人を惹きつける作用を果たしたといえよう。そして、これは、漫撒を起点として始まった易武土把総管轄区域内への石屏漢人入植を、南部の易武へと拡大していく後押しとなったと考えられる。

終わりに

本稿で論じてきた内容を整理すると、以下の3点にまとめられる。

- ①雍正年間の改土帰流以降、普洱府への石屏漢人の入植が進み、乾隆年間末には普洱府各地に会館を建設、更にそれを互いに結びつけることで広くネットワークを築いていった。
- ②漫撒石屏会館の建設には、茶山管理者である倚邦土把総曹氏と易武土把総伍氏の協力があった。この背景には貢茶献納の負担に苦しむ両土把総が、当地で茶園を営む石屏漢人移民の協力を必要とする事情があった。
- ③漫撒における石屏会館、そして、寄付者として易武土把総伍氏の名を連ねる碑文の存在は、長期に渡り、入植や交易で易武や漫撒を訪れる石屏漢人に心理的効果を与え、この地域への移住を促進し、茶園開発を後押しする要因の一つとなった。

27) 唐立編前掲『中国雲南少数民族生態関連碑文集』(pp.3-22)。

清水享・立石謙次 2008「碑文が語る生態史——地域住民からみた生態環境の変化」(『論集モンスーンアジアの生態史——地域と地球をつなぐ——第2巻 地域の生態史』pp.35-53)。

普洱茶の解説をする際、その産地としてメコン川東岸の六大茶山がしばしば取り上げられてきた。しかし、史料ごとに六大茶山の名に相異が見られる原因については従来あまり指摘されてこなかった。地図を概観すると、従来の六大茶山（攸楽、革登、倚邦、莽枝、蛮崙、漫撒）は、そのほとんどがメコン川と磨者河に挟まれた地域であったが、時代が下るにつれ、六大茶山に易武の名が含まれるようになり、茶山が磨者河を超えて東側に広がっていったことがわかる。こうした茶山変遷の歴史において、その重要な契機となったのが、漫撒における石屏会館の建設であり、茶山を管理する倚邦土把総曹氏と地元の易武土把総伍氏が示した漢人入植を支持する姿勢であった。そして、石屏漢人は両土把総の名を碑文に残すことで、自らの入植の正当性を示し、当地を訪れる同郷者に視覚的に訴えることが出来た。その中で石屏会館の建物自体もまたシンボリックな役割を果たし、同郷人を惹きつける呼び水になったといえよう。

今、我々が「漫撒新建石屏会館記」を目にすることが出来るのは、単なる歴史的な偶然ではなく、石屏漢人がこの碑文にそれだけの有用性と価値を認め、代々伝えてきたからであろう。

《補説》現在の漫撒の状況

漫撒の状況を理解するために、2010年3月25日に筆者が漫撒を訪れ、その際に得た情報を中心に若干の説明しておく。現在、漫撒村は交通の便の良い道路沿いに移っており、元の場所には存在しない。旧漫撒村は山の中腹の平地上に位置し、すでに村民は居住しておらず、建築物も撤去されているため、車道はなく、徒歩或いはバイクでのみ行くことが可能である。旧漫撒村には、家屋の土台石や木材があるのみであり、村の跡はほとんど確認できず、易武郷の人ですら正確な場所を把握していない（写真②と③）。旧漫撒村に残る茶の交易路は一方が易武に通じ、もう一方が漫撒、大荒壩、磨者河、倚邦、思茅へと続く（写真④）。

現地を訪れた際、偶然旧漫撒村の村民であった紀氏女性（45）と鐘氏男性（46）に話を伺う機会を得た（写真⑤）。聞き取りについては筆者自身が中国語で行なった。紀氏と鐘氏は石屏出身の漢族であるが、何代も前に移ってきたため石屏を訪問したことはないとのことである。両氏は、この日、お茶を摘むために旧漫撒村に通るかかった次第である。現在、彼らは新漫撒村に住んでいるが、幼い頃から旧漫



写真② 柱の土台石。



写真③ かつて漫撒石屏会館があったと推測される旧文廟跡。



写真④ 村を貫く茶の交易路。この道は、手前は易武、まっすぐ行けば倚邦、さらには思茅へと続く。左側が旧石屏会館跡であり、交易路に面している。



写真⑤ 茶葉を摘みにやってきた旧漫撒の村民。





図2 六大茶山地図

典拠：雲南省測絵局編印 1990年『勐臘県地図』を参考に作成。

撒村で育ったという。新漫撒村への引越しは、交通の便を考え、1984年10月に政府の命令によって行なわれた。この際に村の戸口管理を行なったのが紀氏である。紀氏によれば、村の引越し以前、旧漫撒村の戸口は37から38戸であったが、村の移動により5から6戸を残すのみとなり、1988年に最後の2戸が新漫撒村に引越し、住人がなくなったという。ちなみに新漫撒村の人口には2004年の段階で118人であるという。

また、碑文について両氏に尋ねたところ、鐘氏から見たことがあるとの回答を得た。鐘氏によると、かつて文廟であった村の小学校には何枚かの碑文が存在したという。こうしたことから、「漫撒新建石屏会館記」碑文は旧漫撒村の文廟にあったと推測され、石屏会館が文廟に転用されたと考えられる。

《引用文献史料一覧》

【中国語（五十音順）】

- 雲南学会輯『雲南省地誌（思茅県）』民国10年〔1921〕刊。
- 雲南学会輯『雲南省地誌（寧洱県）』民国10年〔1921〕刊。
- 袁嘉穀纂修『石屏県志』民国17年〔1938〕刊。
- 阮元等修『雲南通志稿』道光15年〔1835〕刊。
- 岑毓英等纂修『雲南通志』光緒20年〔1894〕刊。
- 檀萃（1724～1801）輯『滇海虞衡志』志草木第十一、茶（『問影樓輿地叢書』）。
- 李弘一撰『鎮越県新志稿』1984年（台北、復仁書屋）。
- 梁星源修『普洱府志』咸豊元年〔1851〕序刊。

【英語】

China Imperial Maritime Customs, *Decennial Reports 1902-1911*